

アートとケア

アール・ブリュットから受けるもの

4

アール・ブリュットとは、
美術教育を受けていない人々が創造する「生」の芸術。
心身に障害を持つ作家も少なくない。
あるがままの作家の内なる世界とのやりとりを迫る作品は、
私たちに何をもたらすだろうか。



「西山洋亮の世界」

(制作年不詳 技法：紙、油性ペン、水性ペン H251 mm×L352 mm)

撮影：高石巧

アール・ブリュットがもたらす「まなざし」

文化活動家
アサダワタル

野宿生活者とのパフォーマンスや肢体障害者との演劇活動を通じて、私は、芸術教育を受けた作家たちのそれとは違う、その人の人生そのものが^{にじ}しみ出る（あるいは、しみ出るしかなかった）表現というものがあることを知った。しかし、それがなぜ自分をそこまで捉えて離さないのか、言語化できないでいた。

そんなときに、アール・ブリュットに出会った。自分の心の中が一気に晴れ渡ったことを鮮明に覚えている。

アール・ブリュットの射程は、「作品」だけにとどまらない。障害のある人の特異^{まれ}な日常の「行為」までも「表現」として捉える。福祉現場では「問題行動」として正される行為そのものに新たな価値

を見だし提示することで、アール・ブリュット作品の発掘者となることも多い介助者に、これまでにない「まなざし（支援観）」がもたらされることがあるのだ。

都内のある施設では、アール・ブリュットの展覧会やワークショップという手立てを通じて、障害のある利用者と地域住民を表現の力でゆるやかにつなぐという試みが始まっている。

支援の専門性を持った立場では、なぜ現場にアートが必要か、戸惑うことも多いと聞く。しかし、アートがそれに関わる個々人の内側に深く刻まれる中で、「まなざし」は育まれ、利用者と介助者の関係性は確実に変化することだろう。

今月の作家

西山洋亮 Yosuke NISHIYAMA

1988-2015 年／東京都出身

不規則性の美と形容したい。西山の創作は自宅や絵画教室で行われていた。スケッチブックのページを行ったり来たりしながら行われるため、随分前に描いたページに、数年後にまた少し継ぎ足したりする。よって制作期間は、どの作品も不詳だ。完成するというものではないのかもしれない。言葉がほとんど話せなかった彼にとって、自己を表現する自由な空間を紙面に見つけたのであろう。

（解説：小林瑞恵）

企画協力：NPO 法人キャンサーリボンズ
「サンクスナース」プロジェクト